

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：17102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885056

研究課題名(和文) 子どもによる授業分析を中核としたカリキュラム改善過程の実証的研究

研究課題名(英文) Process of Curriculum Improvement with the Lesson Analysis by Children

研究代表者

清水 良彦 (SHIMIZU, Yoshihiko)

九州大学・人間・環境学研究科(研究院)・助教

研究者番号：60735140

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、授業分析の新たな参加主体として子どもが参加する「子どもによる授業分析」を開発・実施し、授業実践の多面的な解釈・分析を可能とする新たな授業分析方法を開発することである。本研究を進めるにあたって、研究協力校の選定が進展せず研究データの収集が十分に進展しなかった。他方、カリキュラム研究に関する基礎的研究、著書の分担執筆や学会発表、高等学校における出前講座等を通じた本研究の成果の発信については着実に進めることができた。

研究成果の概要(英文)：We have developed a new method of the lesson study named “Lesson Analysis by Children” in order that we are able to interpret the fact of a lesson from various angles. We have an idea that new participants bring clues to improve the classroom lessons and constructed academic theories of education. To be concrete, we select children attending the lesson as new participants in “Lesson Analysis”. We did not obtain teachers who collaborated in this study and, consequently, made an effort to provide information about this study through academic meetings and seminar at a high school.

研究分野：教育方法学

キーワード：カリキュラム研究 カリキュラム改善 授業研究 授業分析

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、教師が自律的・協同的に自らの授業実践の省察を行う日本型の授業研究が「レッスンスタディ (Lesson Study)」としてアメリカに紹介され、国際的に注目されるようになってきた。また、日本国内においても授業改善や教師の力量形成、学校づくりの観点から、授業研究の機能や重要性が再認識されている(秋田喜代美・キャサリン・ルイス編『授業の研究 教師の学習』明石書店、2008年)。他方、「開かれた学校づくり」の進展の中で、学校運営協議会などを通して学校運営や学校管理に保護者や地域住民などが学校経営・カリキュラム評価等に参画するとともに、「子どもの権利条約」との関連から「子どもの参加」が見直され、授業づくりに子どもが参加する試みなども行われている状況にある。

以上の背景からは、授業研究の発展が日本国内外で期待される一方で、現在、日本の学校教育では学校と子ども、保護者、地域住民とをつなぐ様々な取り組みがなされていることが分かる。佐藤学は「学びの場としての学校」のなかで、保護者や市民が教師と協力して教育活動に参加して授業研究に取り組む、地域を基盤とした「学びの共同体」の構築を提唱しているが、その試みは未だ限定的であり、成熟していない(佐伯胖・藤田英典・佐藤学編『学びの共同体』東京大学出版、1996年)。また、同じく佐藤学が「授業研究の現在」(日本教育方法学会編『日本の授業研究 下巻』学文社、2009年)において指摘しているように、現在、授業研究が直面している課題は、様々な理論や分析方法を用いて授業の事実、子どもの学びを多面的・総合的に解釈することである。すなわち、授業の事実や子どもの学びを様々な視点から解釈・分析するとともに、可能な限り多様な授業の事実を把握することが求められている。しかしながら、これまでの授業研究は子ども、保護者、地域住民などの参加を促すことなく、その実施主体を教師(授業者・現場教師)や研究者に“閉じて”きた。

以上の問題を解決するために、申請者は、授業研究を新たな実施主体に“開く”という解決策を立てた。授業研究に新たな実施主体が参加することで、授業研究レベルでの「参加」が実現されるとともに、従来の授業研究とは違った視点から授業の事実を解釈・分析し、これまで把握することのできなかった授業の事実を捉えることになると考えられる。本研究では、50年余り続く日本固有の授業研究方法である「授業分析」(重松鷹泰『授業分析の方法』明治図書、1961年)に注目する。授業分析は既存の理論ではなく、飽くまでも授業の事実(具体的には詳細な授業記録)に基づいて授業を解釈・検討する。このことが、教育経験の長短や、教師と研究者の垣根を越えて“同じ土俵”で授業分析に参加することを可能としてきた。同様に、授

業記録を介在させることで新たな実施主体が授業分析に参加できると考えられる。

具体的には以下の4点の解決策を立てた。

- ① 従来の授業分析に参加することのなかった新たな実施主体が参加する授業分析方法を開発する。
- ② 開発した授業分析方法を用いて実際の学校現場で行われる授業を対象に授業分析を実施する
- ③ 授業分析への参加者を対象として半構造化インタビューを行い、その質的分析によって開発した授業分析方法の意義を検証する。
- ④ ③のインタビュー記録から分析手法の改善点を明らかにし、他の学校現場で援用可能な分析手法に洗練する。

新たな実施主体として、申請者は学習者である子どもに注目してきた。申請者のこれまでの研究では、子どもが参加する「子どもによる授業分析」を開発・実施し、子どもの授業分析視点の特徴・特性を解明するとともに、「子どもによる授業分析」の意義を明らかにしている。上記①及び②に関連して、申請者は「子どもによる授業分析」方法の開発を行い、佐賀県 W 市立東小学校(仮名)高学年児童を対象とした授業分析を継続して行った。研究成果としては以下の三点が挙げられる。第一に、授業分析によって得られた子どもの記述データを対象とした定性的コーディングによって、授業に対する「内在的視点」と「外在的視点」という2つの視点を析出した(清水 2011, 2012)。「内在的視点」は子どもが学習者として再経験的に授業を検討する視点であり、「外在的視点」は子どもが俯瞰的・メタ認知的に授業を検討する視点である。第二に、授業者及び子どもを対象とした半構造化インタビュー(上記③)の質的分析により、「子どもによる授業分析」が有する研究的意味として「授業づくりへの活用」及び「教師の授業観・子ども理解の深化」、教育的意味として「子どもの再学習」、「子どもの自己変容」の4つを明らかにした(清水 2011)。

しかしながら、上記の研究においては子どもの授業分析視点の特性と「子どもによる授業分析」方法の意義の解明が一定程度進んだものの、④広く学校現場で援用可能な分析手法に洗練するという点が不十分であったと言える。よって、本研究では、上記の研究を発展させる位置づけとして、「子どもによる授業分析」を中核としつつ、授業分析前後まで射程に入れたカリキュラム改善過程の実証的研究を行う。

2. 研究の目的

本研究の目的は、授業分析の新たな参加主

体として子どもが参加する「子どもによる授業分析」を開発・実施し、授業実践の多面的な解釈・分析を可能とする新たな授業分析方法を開発することである。現在、授業研究、カリキュラム研究においては、参加（評価）主体として従来の現場教師、研究者だけではなく、子どもや保護者、地域住民まで想定されるようになってきた。しかし、それらの研究・取り組みは未だ構想されている段階であり、具体的に新たな主体が参加する授業研究方法は開発されていない。そこで、本研究では「子どもによる授業分析」方法を学校現場で広く援用可能な分析手法として洗練することを目的とした研究を行う。

3. 研究の方法

本研究では、以下の4点の研究方法を設定する。

- ① 重松鷹泰（1961）以来の「授業分析」に関する著書・雑誌論文、授業記録等の文献資料に加え、国内外の授業研究方法を調査し、それらを参考にしつつ子どもが参加する授業分析手法を開発する。また、最近のカリキュラム研究の知見からカリキュラム改善と授業研究の関係を捉える。
- ② 公立小学校において参与観察を行い、授業記録を作成し、高学年児童を対象とした「子どもによる授業分析」を継続して行う。さらに、授業分析実施後、同一単元の授業記録の作成・分析を行う。
- ③ 授業分析によって得られた子どもの記述データに対して、子どもが授業をどのように分析しているかという視点から定性的コーディングを行う。その結果明らかになる子どもの授業分析視点の特性を検討し、「子どもによる授業分析」がカリキュラム改善にどのように作用するかを分析する。
- ④ 授業者・子どもを対象とした半構造化インタビューにより、「子どもによる授業分析」の意義を解明するとともに、授業分析が授業者、子どもにどのような影響を及ぼしたのかを精緻に捉える。
- ⑤

4. 研究成果

田中統治（2001）は、カリキュラムのもつ多層性について「Ⅰ 制度化されたカリキュラム」、「Ⅱ 計画されたカリキュラム」、「Ⅲ 実践されたカリキュラム」、「Ⅳ 経験されたカリキュラム」の四層から捉え、ⅠからⅢまでを意図されたカリキュラム、Ⅳを意図されなかったカリキュラムとして区分している。このように捉えた場合、従来の教育研究とカリキュラム研究が「教育意図と学習経験の乖離」に無関心であったため、実践者の意図通りに経験されないカリキュラムの「流動性」に着目する必要性があることを指摘して

いる。この点を解明するためには実践者と学習者がカリキュラムを介して相互に作用し合う「教育過程」を対象として、実践者及び学習者双方のパースペクティブ（視界）の相違を明らかにすることが必要である。

本研究において開発した「子どもによる授業分析」は、実践者と学習者の言語によるやりとり（相互作用）の逐語的な授業記録を使用するという点において「教育過程」を対象としているとともに、学習者を授業分析の参加主体として組み込むことによって彼ら（学習者）のもつ分析視点を顕在化させることで、実践者や大学研究者の視点との差異を明らかにしようとするものである。

以上のように、「子どもによる授業分析」は「教育過程」における学習者の「パースペクティブ」を直接的に取り扱う分析手法であると言え、カリキュラム改善やカリキュラム開発といったカリキュラム研究に資する可能性を有している。本研究では、この点を仮説として提示したい。

なお、本研究期間内においては研究協力校の選定、学校現場における参与観察及び授業分析の実施を行うことができなかつたため、今後は研究方法②から④に示した研究に継続して取り組んでいく必要がある。

【参考文献】

- 重松鷹泰（1961）『授業分析の方法』明治図書。
- 重松鷹泰・上田薫・八田昭平（1963）『授業分析の理論と実際』黎明書房。
- 田中統治（2001）「教育研究とカリキュラム研究：教育意図と学習経験の乖離を中心に」山口満編著『現代カリキュラム研究』学文社、pp. 21-33。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計1件）

- ① 清水良彦 畑中大路 金子研太「教育学における分野融合研究の可能性—初任期教員のライフストーリー・インタビューを通して—」九州教育学会、2015年12月6日、名桜大学（沖縄県名護市）。

〔図書〕（計2件）

- ① 元兼正浩監修 野々村淑子 藤田雄飛 金子研太 清水良彦 他16名『子ども論エッセンス』花書院、2015年、総頁数123頁。
- ② 元兼正浩監修 清水良彦 金子研太 日高和美 他『教職論エッセンス』花書院、2015年、総頁数204頁。
- ③ 元兼正浩監修 清水良彦 佐藤晋平 波多江俊介『新訂版 教職論エッセンス』花書院、2015年、総頁数126頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 良彦 (SHIMIZU, Yoshihiko)

九州大学大学院人間環境学研究院・助教

研究者番号：60735140